

癒しの詩人、祈りの作曲家、 かく語りき?!



坂村真民

1909年(明治42年)、熊本県玉名郡府本村(現・荒尾市)生まれ。本名、昂(たかし)。8歳の時、父親が急逝し、どん底の生活の中、母を支える。神宮皇學館(現・皇學館大学)卒業後、熊本で教員となる。その後、朝鮮に渡って師範学校の教師に。終戦後、朝鮮から引き揚げて愛媛県に移住。高校の教員として国語を教え、65歳で退職。58歳の時、砥部町に定住し、92歳で砥部町名誉市民に選ばれる。2006年(平成18年)97歳で砥部町にて永眠。

二度とない仮想対談

「真民(しんみん)さん、こんにちは。はじめまして」

「これはこれは、鈴木憲夫先生。はじめにお目にかかります。先生が曲にしてくださったおかげで、これまでおなじみのなかった方にも私の詩を広く届けることができ、とてもとても感謝しております。ありがとうございました」

「いえいえ、多くの合唱ファンに歌ってもらえる曲ができたのは、真民さんの詩に導かれたからこそです。お礼を申し上げるのはこちらの方です」

「同慶の至りです。ところで、どうして私の詩が選ばれたのでしょうか」

「はい、もともとある合唱団を指導される先生から、仏教の心を音楽を通してひろく語りかけるような作品を、というリクエストをいただきましたが、テキスト選びは難航しました。そんな中で出会ったのが真民さんの作品だったので。どれも人の心の奥で響くような詩ばかりでした。深い思索を秘めながら、誰にでもわかる易しい言葉で書かれています。実は私の音楽に対する思いも同じで、易しさの中に音楽を満たすこと、これがとても大切なことだと思っています。事実、この曲は歌いやすいので、発表してからあっという間に各地に広がっていきました。それに、これを海外で演奏すると、言葉は通じないはずなのに聴衆にはちゃんと思いが伝わっているように感じるのです。言葉ではなく曲のスピリットを聴いてくれているんですね」

「そうですね。創作の思いは同じですね。実は私には先達として仰ぐ人がいます。鎌倉時代に全国を破れ衣に裸足で遊行して、踊念仏しながら念仏札を25万人に手渡し広めた一遍上人がその人ですが、私は親しみを込めて一遍さんと呼びしています。一遍さんは難しいことは何一つ言わない。難解な本も書かない。ときに誰でもわかりやすい和歌を詠んで考えを伝えました。わかりやすいからみんながついて来る。それに倣って私も難しい言葉は使いません」

「なるほど、我々三人は『易しさ』でつながっています(笑)。そうすると真民さんの詩には一遍さんのマインドが投影されていると…」

「もちろんです。そもそも、この組曲の表題にもしていただいた『二度とない人生だから』はまさに一度きり、『一遍』そのものです。それに、私が一遍さんに惹かれたのは偉いお坊さんというよりも、ポエジーを持った人だったからです。吹く風、立つ波に大自然の息吹を聞くことのできる、生まれながらの詩人だったからです」

「ああ、それでわかりました。真民さんの作品にも鳥のさえずり、虫のすだきに耳を傾けておられるものがたくさんあります。もともとこの作曲の目的は『仏教』の教えをわかりやすく伝えることでしたが、お話を伺っているうちに、一遍さんも真民さんも特定の宗教の枠をすでに超えておられるような気がしてきました」

「おっしゃる通り、『一遍』のもう一つの意味は、『いちにしてあまねく』



「念ずれば花ひらく」詩碑。
愛媛県伊予郡砥部町、坂村
真民記念館玄関前で来場者
を迎えている。揮毫は詩人
の手による。

です。私は釈尊を尊崇してい
ますが、卒業したのは神道

の学校ですし、机にはいつも聖書を置いています」

「だから真民さんの詩には壇上から教え説くようなところがない。誰にでもす
んなり受け入れられる。たとえば代表作の『念ずれば花ひらく』は、きっとたくさん
の若い人を力づけたことでしょう」

「これは一遍さんに出会う前にできた詩ですが、念ずることの大切さは、すでに
母から教えられていました。母は早くに父に先立たれ、当時8歳の私を筆頭に5
人の子どもを誰一人失うことなく一人で育て上げました。母が念じたことは、わ
が子の立身出世でも何でもなし。それぞれがそれぞれの道で人間らしく生きてく
れることでした。母の名はタネといいます。その種から私たち5つの花が咲かせ
てもらったのです」

「ああ、いいお話だ。花が咲くといえば、『花・願い』はとてもシンプルだけど深
い味わいがありますね」

「私が花に打たれるのは、その限りある命を一心に生きているからです。でも花
は見えないところで支えてくれる根を信じて咲いています。いっぽうで根は花が
美しく咲くのを願っている。私も自分を花ではなく下根の者だと思っていますの
で、根というものに特に愛着を寄せています」

「いえいえ、真民さんはたくさん花を咲かせておられますよ。支えてくれる根、
というお話が出ましたが、『妻を歌う』には長年真民さんを支えてくださった奥様へ
の限りなく優しい眼差しが感じられます」

「平成6年の寒い時期でした。家内が突然くも膜下出血で倒れ手術を受けました。
それまで59年間連れ添ってくれ、苦勞をかけた家内を絶対に死なせてなるものか
と一心に念じたことが通じたのでしょうか、幸い命はとりとめました。寝ているだ
けでもいい、側にいてくれるだけでいい。そんな思いが穏やかな春の日のような
詩になりました」

「その穏やかさを私も感じて、それをコーラスに託しました。いっぽう、幸いお
元氣になられた奥様をご覧になる真民さんの眼には溢れるものがあつたでしょう、
その眼に滲んで見える情景をピアノ伴奏が描いています。そして続く『つゆのごとく
に』では、間奏曲的に今度はピアノを休ませてじっくり合唱を聞いてもらうアカペ
ラとしました」

「とても効果的だと思います。ご覧の通り、この詩はすべてひらがなで書いてい
ます。結ばれた露が芋の葉の繊毛の上を転がるような柔らかさを出しました。そ
してその文字の柔らかさを鈴木先生が巧みに音楽に昇華させていただきました」

「ありがとうございます。この間奏曲があつて、次の軽快な『からっぽ・サラリ』が
生きてきました」

(次頁に続く)



鈴木憲夫

1953年宮城県生まれ。1975年、
東北大学法律学科卒業後、東京音
楽大学作曲科研究科において伊福
部昭氏のもとで作曲、管弦楽法、
音楽美学など2年間の研鑽を積む。
指揮を山田一雄氏に師事。作品は
合唱曲、器楽、吹奏楽、管弦楽と
幅広い多数の作品を発表。楽譜、
著書は海外からのものも含め多数
刊行される。特に合唱曲は全国各
地で演奏され、近年「鈴木憲夫の
世界」のプログラムが組まれるな
どファンの支持層も幅広い。



二度とない人生だから (3)



一遍上人御廟所。神戸市兵庫区真光寺。上人は全国を遊行し、1289年神戸の地で往生を遂げた。このたび、神戸男声合唱団が真民さんの詩に導かれたのも上人のご縁か。

「**そ**う、その軽快さこそ一遍さんの真骨頂であり、私の詩作のモットーでもあるのです。捨聖と呼ばれた一遍さんは重いものはみんな捨てた。捨てるとおのずと軽くなります。そうして心をからっぽにすると森羅万象への愛が生まれ、サラリと詩が生まれるのです」

「**な**るほど。『**こおろぎ**』の詩を拝読すると、大自然の一部であるかよわい生き物への真民さんの限りない愛を感じます。なので、私はこれを宗教曲のような感覚で作りました」

「**梁**塵秘抄に『仏は常にいませどもうつつならぬぞあわれなる』という有名な歌があるように、どんなものにも仏の姿を見ることは日本人が昔から続けてきたことです」

「**そ**ういう思いは『**二度とない人生だから**』にも滲み出ています。鳥の声、一匹のこおろぎ、つゆくさのつゆ、あらゆるものに『**縁**』というものが感じられます」

「**そ**の通りです。人生一度きりだから好き勝手しよう、というのではなく、奇跡のようにいただいた人生だから、今この時に巡り合った生き物との縁、世話になった人の縁、そして自分を包み込む大宇宙との縁に感謝したいというのが私の思いです。そして一遍さんもこんにち、ただいまに立つ人でした。今この時、という信念によって『**時宗**』の開祖と呼ばれるのです。」

「**私**も、今こうして真民さんとお話しできるご縁に感謝しています。心にしみのお話をいただいて本当にありがとうございました」

「**こ**ちらこそ、この組曲を通じて私の思いを皆さんに伝えてくださって、心から感謝しております。そしてこの曲が長く歌い継がれることを願っています」



鈴木憲夫先生HP



坂村真民記念館HP

*この「仮想対談」は、作曲者鈴木憲夫先生のご賛同と加筆を得て、坂村真民記念館様の認可・監修のもと、編集部（ライター：藤野恵）が創作したものです。

(参考資料)

「念ずれば花ひらく」 坂村真民 柏樹社 昭和 54 年

「愛の道しるべ」 坂村真民 柏樹社 昭和 58 年

詩集「宇宙のまなざし」 坂村真民 サンマーク出版

詩集「二度とない人生だから」 同

詩集「念ずれば花ひらく」 同

「一遍上人語録 捨て果てて」 坂村真民 大蔵出版 1989 年

「死してなお踊れ 一遍上人伝」 栗原 康 河出文庫 2019 年

鈴木憲夫ホームページ

他



Stage 2

ぶらっと出かけるフォークの散歩 「ブラフォー三昧」

AI君にきいてみた

G7広島サミットでも議題に上った「生成AI」の代表選手ChatGPTのAI君に、今日の曲目について日本語で訊いてみました。AI君の回答は、余分なところは省略していますが、オリジナルに忠実に引用しています。（2023年5月時点での回答）

Q: まずは「ブラフォー」、つまりブラザーズ・フォーについて教えてください。

AI: 「ザ・ブラザーズ・フォー」は、1950年代後半から活動しているアメリカ合衆国の音楽グループです。バージニア州のワシントン大学で出会った4人の学生によって結成されました。

Q: バージニア州のワシントン大学、って何かおかしくないですか。

AI: 申し訳ありません。正しくはワシントン州のシアトルで出会った4人の学生でした。誤解を招いたことをお詫びします。

Q: 誤解を招いた、なんて政治家の弁明みたいですね。ところでブラフォーは日本でもたいへん人気になりましたが、その理由は何だったのでしょうか。

AI: 日本でも人気を博した理由はいくつか考えられます。

1) フォーク音楽のブーム: 1960年代(1)には、日本でもフォーク音楽が大きな人気を集めました。The Brothers Fourはその時期に日本に進出し、独自のフォークサウンドとハーモニーが日本の聴衆に受け入れられました。

2) ハーモニーとメロディ: 美しいハーモニーと心地よいメロディを持つ楽曲を提供しました。その豊かな音楽性は、聴衆の心を掴み、多くの人々に感動を与えました。

3) 歌詞の内容: 彼らの曲には、自然や愛、郷愁といったテーマがよく取り上げられており、シンプルでありながら深い感情を描写しています。これらの歌詞は、聴衆の共感呼び起こし、日本の文化や感性と共鳴しました。

これらの要素が組み合わさり、彼らの音楽は、その後も日本で長く愛され続け、多くの人々にとって特別な存在となりました。

Q: なるほど。日本の事情にも詳しいですね。

AI: 私は訓練データとして広範な日本の情報や資料を使用しています。そのため、日本に関するさまざまなトピックについての知識を持っています。また、日本のユーザーからの質問や対話を通じて、日本の文化やトピックに関連する情報を学習しました。それにより、日本の特定のトピックに関する知識を持つことができるようになりました。

Q: では今日の演奏曲目「イエロー・バード」を解説してください。

AI: “Yellow Bird”は、カリプソ音楽の要素を取り入れた楽曲です。元々はハイチの民謡であり、英語の歌詞(2)が加えられて広く知られるようになりました。楽しいカリプソのリズムとメロディに乗って、情感豊かな歌詞が織り成されています。The Brothers Fourのカバーバージョンは特に知られており、グループのハーモニーとアコースティックサウンドが曲に新たな魅力を与えています。

Q: カリプソ音楽って？

ぶらっと出かける フォーク三昧

(1)1960年代、ベトナム戦争が激しさを募らせ、ジョン・バエズやボブ・ディランの歌う反戦歌がフォークの表舞台に立つようになってくる。しかし、ブラザーズ・フォーの場合、反戦フォーク歌手とは違って、髪も短く切りそろえ、思想性を感じさせないレパートリーに徹して、いかにも西海岸の清潔な大学生イメージが売り物だった。そのため彼らの歌は「カレッジ・フォーク」と呼ばれた。

(2) 原曲はフランス語。1949年、ハイチでポルト・フランス万国博覧会が開かれ、アメリカでもトロピカルな音楽「カリプソスタイル」がブームに。最初に英語バージョンをリリースしたのはノーマン・ルポフ合唱団だった。





「ブラフォー三昧」 (2)

(3) カリブ音楽最大ヒットは、ハリー・ベラフォンテの「バナナポート」だった。

AI: カリブソ(3)は、アフリカのリズムやメロディにカリブ海地域の音楽要素を組み合わせたものです。キャッチーなメロディ、リズムカルな打楽器の使用、独特の歌唱スタイルなどが特徴で、カリブ海地域の音楽の代表的なジャンルの一つとして知られています。

Q: 「キャッチー」ってAIにしては妙にくだけてないですか。

AI: おっしゃる通りです。申し訳ありませんでした。「心に残る」「耳に残る」「魅力的な」という意味で申し上げましたが、私の表現がくだけたものになってしまったことをお詫び申し上げます。より適切な表現を使うように注意します。ご指摘ありがとうございます。

Q: では次に「花はどこへ行った」について教えてください。

AI: この曲は、1950年代から1960年代にかけての平和運動や社会的な変革を象徴する歌として知られています。“Where have all the flowers gone?”(花はどこへ行った)というフレーズが繰り返し歌われます。このフレーズは、戦争や暴力によって美しいものや希望が奪われてしまった状況を表現しています。花が若者によって摘まれ、若者が戦場に送られ、戦場で花が墓地の墓標となり、そして花の代わりに墓標が並ぶというストーリーを描いています。これは戦争や暴力の連鎖(4)を暗示し、人々が平和や調和を求める必要性を訴えています。

Q: 花を摘んだのは若者ですか。

AI: すみません、誤解を招く表現でした。実際の歌詞では、“young girls”(若い女の子)が花を摘んでいると歌われています。

Q: 細かいことで揚げ足とってすみません。それはともかく、現代にも通じる歌では。

AI: はい、その通りです。これは、戦争や暴力の無意味さや人間の無知さに対して訴えかけるメッセージを持つ歌です。戦争や紛争は現代においても世界中で起こっており、平和や調和を求める声が必要とされています。そのためこの曲は、時代を超えて共感や啓発を与える力を持つ歌として、現代においても重要な意義を持っています。

Q: なかなかいいこと言いますね。じゃあ、次は“The Green Leaves of Summer”を。

AI: “The Green Leaves of Summer”は、1960年の映画『荒野の七人』のサウンドトラックとして知られています。この映画は西部劇の名作であり、そのテーマ曲は、荒野での大冒険や決戦の情熱を表現する壮大な楽曲となっています。

Q: はあ？ この曲の邦題は「遙かなるアラモ」ですけど？

AI: 申し訳ありませんでした。先ほどの回答において、映画のタイトルを誤って伝えました。“The Green Leaves of Summer”は、1960年の映画『アラモ』のサウンドトラックとして使用されました。その感傷的なメロディと歌詞(5)から広く愛される曲となりました。

Q: とときどき「すかたん」言いますね。

AI: (しばし黙考) すみません、以前の回答で「すかたん」という表現を使用したことはありません。

Q: たしかに。「すかたん」は翻訳不能だから気にしないで。次は“Try to remember”です。

(4) ピート・シーガーのオリジナルは3番までだったが、その後ジョー・ヒッカーソンが4番5番を加えたことで、「花」から「墓場」までのループが完成し、戦争という蛮行を繰り返す人間の愚かさがいっそう鮮明になった。



(5) 主人公デイビー・クロケット(主演ジョン・ウェイン)が決戦前夜に昔日の追憶に浸る場面で使われている。アカデミー歌曲賞にもノミネートされた。

「ブラフォー三昧」 (3)



(6) オフ・ブロードウェイで1960年から2002年までの42年間に、17162回の最長上演のタイトルを持つ超ロング・ランのミュージカル。

(7) ブラザーズ・フォーの出世作と言われる1960年のヒット曲。シアトルからサンフランシスコに出てきてすぐ、メジャー第1打席でホームランを打ったようなものだった。

(8) 詞を書いたのは女性のフラン・モーズリー。易しい言葉遣いの中にも美しい詩的表現が光る。音楽も美しい。そこへブラフォーの清潔感が加わって、まったく貧乏臭さや悲惨さを感じさせない。

AI: この曲は、1960年のミュージカル“The Fantasticks”(6)で初めて登場しました。メロディアスで情感豊かなバラードであり、過去の思い出や失われた愛、そして喪失感に焦点を当てた歌詞が特徴です。歌詞の中で、聴衆は懐かしい思い出を回想し、過ぎ去った時間や失われたものへの哀愁を感じることができます。

Q: 歌の中に出てくるSeptemberはアメリカでは哀愁を感じる季節なんですか。

AI: はい、おっしゃる通りです。9月は夏から秋への移り変わりの時期であり、自然の美しさや季節の変化に対して感傷的な感情を抱く人も多いです。

Q: アメリカ人にとって胸キュンな歌ではありませんか。

AI: はい、この曲は懐かしい思い出や幸せな瞬間を思い起こさせる力強いメロディと歌詞を持っています。

Q: 「胸キュン」をなんとなく理解したみたいですね。さて次は“Green fields”です。

AI: “Greenfields”は彼らのデビューシングル(7)です。この曲は1960年にリリースされ、大きな成功を収めました。自然や平和をテーマにした心地よいメロディと歌詞が魅力であり、聴く人々に心の安らぎや喜びを与える曲となっています。

Q: 環境問題にも通じるようなところがあるように思いますが。

AI: その通りです。歌詞の中で描かれる「緑の野原」や「風が吹く場所」といった自然の景観や自然の要素は、環境の破壊や自然資源の減少によって失われることへの警鐘とも解釈できます。

Q: 「風が吹く場所」なんて歌詞がありましたっけ。

AI: おっしゃるように、「風が吹く場所」というフレーズは他の歌詞や曲で使われることがあります。具体的に“Green Fields”の歌詞に存在するわけではありませんでした。誤った情報を提供したことをお詫び申し上げます。

Q: うっかり聞き流すところでした。では最後に“Seven Daffodils”「七つの水仙」を。

AI: “Seven Daffodils”は、1963年に発表した曲です。この曲は彼らの最も有名な曲の1つであり、その美しいメロディと心温まる歌詞で知られています。

Q: この歌のテーマは何ですか。

AI: 歌のテーマは、失われた愛とその悲しみです。この曲は、恋人が去り、主人公がその別れと失った愛について思いを馳せる様子を描いています。

Q: ちょっと。これって貧乏青年が彼女に七つの水仙を捧げる歌(8)じゃないですか。

AI: おっしゃる通り、別れの歌ではなく、恋人への贈り物や愛情表現に焦点を当てた歌です。混乱を招いたことをお詫び申し上げます。彼らの貧しい状況にもかかわらず、若者が水仙の花を見つけ、彼女にプレゼントすることで愛を表現しています。

Q: 知らないことでも絶対に知らないとは言わずに、結構それらしい答を返しますね。

AI: 申し訳ありませんでした。私は多くの情報を学習しているAIですが、全知全能ではなく、知識の限界もあります。正確な情報を提供することを心がけていますが、時には誤解や情報の不足が生じることもあります。

Q: 知らない、というのも立派な答えですよ。

AI: ありがとうございます。確かに、知らないことを正直に認めることも重要です。

Q: うーん、それが人間らしいとは限りませんがね…

Stage 3

東北地方の民謡による 七つの男声合唱曲

唄には先祖の 記憶が宿つとる

この前の震災からもう干支が一回りしたど。いや、この前の大災害に限らね。東北は大昔から何度も何度も、大きな地震やひどい冷害に見舞われた。それに天災だけだばまだええだども、年貢の取り立ても、たとえ飢饉の時でも過酷だったべ。大勢が飢えて亡くなった。こうして東北は天からも人からも痛めつけられて、ずっと辛い目を耐えてきたんだ。

オラか？オラはザシキワラシだ。オラは東北の人がたに昔話の中で長〜く語り継がれてきた。中にはオラを見だって人も大勢おる。オラが今でも生きていって何よりの証拠だべ。だども、東北が語り継いだのは昔話だけではねえ。民謡やわらべ唄がまた、東北にはいっぱいある。それはなあ、唄っこの中に過去の記憶と未来への教訓を忍ばせて、次の世代に伝えようとしたからだべ。それを聞くと、東北の耐えてきたとてつもない苦勞がしのばれるんだ。

中には鎌倉時代から伝わるのものもある。たとえば「**そんでこや**」(1)って唄。鹿が昼寝でマタギの夢を見るって歌うんだども、鹿は北条の落ち武者、マタギは足利の追っ手だ。それもそのはず、岩手県の下閉伊郡というのは山深いところさ。落ち武者伝説があってもおかしくね。あからさまには北条だ、足利だとは歌えねがら、こんな風に置き換えて歴史を伝えたいんだべな。だから「そんでこや」とは「忍んで来いや」のことかもしれねなあ〜。

子守唄にも昔を伝えるものがある。貧乏な家のわらしは十にもなれば奉公さ出される。女の子なら子守だ。自分のめんこい弟や妹じゃなくて、裕福な家の赤子を守りする。「**おどのもり**」(2)とは、つまり「お殿守り」のことだ。泣き止まね赤子を背負って「他人の軒端に立ち寄れば/せわしやかましと追い出され/おどのもりやつらいもんだ」と歌うんだども、そのあと「いっそ死んでしまったら/向いの墓場の土となる」と続く。泣きたいのは行き場のない子守の方だ。

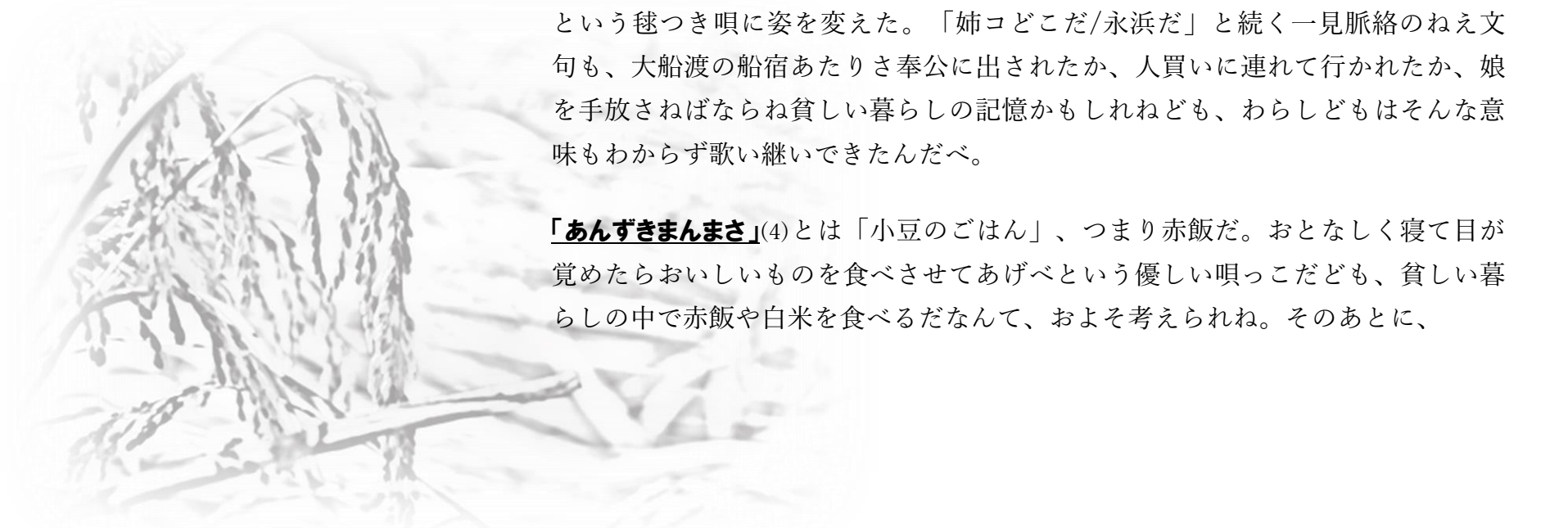
また、わらべ唄にはからかい唄というのがあってな。たとえば男の子と女の子が一緒にいればそれだけでからかわれる。だれかさんとだれかさんが仲がいいと聞くと、「**耳が三寸**」(3)にも伸びるほどだ。それがいつのまにかポン、ポン、ポン、という毬つき唄に姿を変えた。「姉コどこだ/永浜だ」と続く一見脈絡のねえ文句も、大船渡の船宿あたりさ奉公に出されたか、人買いに連れて行かれたか、娘を手放さねばならぬ貧しい暮らしの記憶かもしれねども、わらしどもはそんな意味もわからず歌い継いできたんだべ。

「**あんずきまんまさ**」(4)とは「小豆のごはん」、つまり赤飯だ。おとなしく寝て目が覚めたらおいしいものを食べさせてあげべという優しい唄っこだども、貧しい暮らしの中で赤飯や白米を食べるだなんて、およそ考えられね。そのあとに、

(1)岩手県下閉伊郡の祝い唄。問答形式で歌われた。問いかけ唄と返し唄がある。「かのしし」とは「鹿のシシ」の意。

(2)福島県相馬地方の子守唄。

(3)岩手県のわらべ歌が出典。毬つき唄のリズムにからかい唄を複合させた創作。永浜は大船渡港に今も残る地名。





「あんころ餅に醤油だんご/芋コにほどコに里梨コ」と続く。ひもじい思いをしながら子守する娘コが、自分の食べたいものをあれもこれもと挙げていったんだな。歌いながら翼を思いっきり広げて、空想の宙を舞っている娘コの姿が思い浮かぶでねえか。

(4)岩手県盛岡の寝かせ唄。

わらしどもにとって雀は身近な生き物だ。「**雀ど雀ど**」(5)は「ああいえばこういう」式の連想が続いて面白え。だども、一番の主題は雀が「腹減って泣く」にあるんだな。雀とはすなわち自分ら貧乏な百姓だ。「腹減ったら田作れ」と言われても、せっかくできた米はネズミに引かれる。つまり年貢にとられるってことだべ。百姓にとっちゃ「盗られる」という感覚だ。自分らの口には入らねえ。ついには泣く泣く口減らしする親もいる。尻取りの結びにある「夜鷹にさらわれる」とは、脅かしなんかでねえ。ほんどのことだ。面白えようで悲しい唄っこだ。

(5)秋田県の尻取り唄。

津軽の盆踊り唄として今も残る「**ホーハイ節**」(6)にはいろいろ伝説もある。独特の裏声はアイヌ起源だって言うども、ほんどのところはわがんね。津軽の殿様が立ち寄った茶店のお婆を見て、「婆の腰や曲がった」と歌ったもんだから、周りの者が曲がった腰の連想から「稲の穂が稔る」と返したとか、稲穂に感謝して「穂拝節」になったとかいうども、どれも伝説に過ぎね。だども稲作に関係することだけは確かだ。米の出来には自分らの命がかかっているんだからな。

(6)青森県津軽地方の盆踊り唄。連歌の要領に似て、上の句から連想を得た下の句を即興でついでゆく。かつてはホーハイの「ホー」を吸い込む息で発声したと伝えられる。

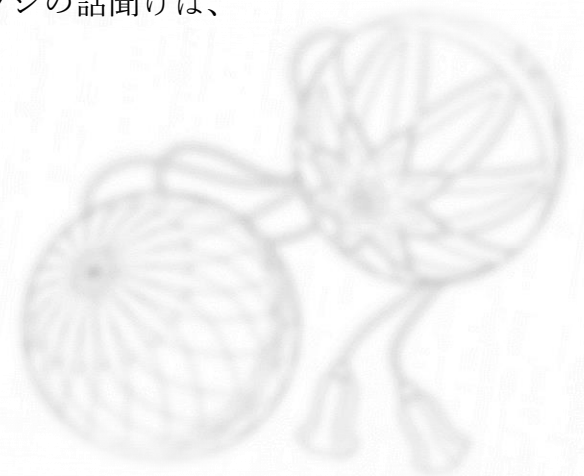
「**遊び歌**」(7)は、指遊びと毬つき唄をあわせたもんだ。指遊びは、ちっこいわらしに歌いながら指の練習をさせる。毬つき唄は古くからあるにはあるども、肝心の手毬は庶民の暮らしになかなかあるもんでねえ。それに木綿糸をまいた毬だとせいぜい一尺ぐれえしか弾まね。立って毬つきできるようになるのは明治になってゴムが入ってからだ。もすかすると昔は毬ではなく、上に投げる「お手玉歌」だったかもしれね。どちらにしても「数え唄」にしてわらしに数を教えた。数がわかるようになれば、大きい子は昔の出来事を物語るように唄で伝えた。中には厳しい年貢を強いた鎌倉幕府を批判したような数え唄もある。こうやって東北の記憶は唄の中で生きてきたんだ。

(7)秋田県のじゃんけん歌と毬つき唄を複合した創作。「ですけ ですけ」は毬つきの擬音。

だども、今ではわらべ唄もすっかり埋もれてしまった。こんなに電気の明るい夜だとザシキワラシの居場所もねえ。もう60年前にはなるだが、小倉朗先生が東北の唄っこを主題にして現代曲に蘇らせてくれた。おかげでオラも今日こうして昔のことさしゃべる機会ができた。聞いてくれてありがとよ。まんず、ザシキワラシの話聞けば、みな長者になるんだど。

(参考資料)

「日本わらべ歌全集」柳原書店
「日本民謡大全集」共栄書房
「日本庶民生活資料集成」三一書房
「ザシキワラシと婆さま夜語り」佐々木喜善 河出書房新社2020年
「遠野のわらべ唄」伊丹政太郎 岩波書店1992年
「わらべ唄歳時記」武田 正 岩崎美術社民俗民芸双書1969年
「現代音楽を語る」小倉 朗 岩波新書1970年
(取材協力)
日本玩具博物館(姫路市)
(東北ことば指導)
加藤俊勝(T2 秋田県人会大阪支部)



Stage 4

男声合唱組曲

「月光とピエロ」

月夜のロシニョール

湘南葉山の春は早い。だから僕たちも「春告げ鳥」の名に恥じないよう、ひと足先にホーホケキョと鳴き始めるのがここでの慣わしなんです。

そういえば、葉山でも特に陽当たりのいいこのお屋敷にも、「日本の鶯」と呼ばれた詩人の先生が住んでおられました。いいえ、鶯といっても僕たちとはちょっと種類が違いましてね。なにしろ、その名付け親というのがフランスの有名な画家、マリー・ローランサンなので、鶯といえばあちらの詩歌によく歌われる「夜鳴き鶯」のこと。フランス語ではロシニョール、なんでも月夜によく歌うんだそうですよ。

そして先生の名前は堀口大學。近代日本の詩壇に大きな影響を与えた大先生です。その大先生がどうして「日本の鶯」なのかって？では、少し長くなりますが、お話ししましょう。なにしろ先生は来客が多くて、よくマリーの話がされるので、僕たちも門前の小僧になってしましましてね。えっ？違いますよ。立ち聞きなんかじゃありません。僕たちはきちんと梅の枝にとまって耳を傾けていますから。

時は大學先生が慶應文科の学生のころ。メキシコ赴任中だった外交官の父君から突然かの地へ呼びつけられます。どうやら親友の佐藤春夫(1)と怠け比べをしているという噂が父君の耳に入ったらしいんです。はるばる太平洋を越えた先生は、父親監視のもと、メキシコでフランス語をみっちり叩き込まれます。それは後の詩人、翻訳家として生きる糧となりました。ところがいっぽうで、その後も長く付き合うことになる胸の病を発症してしまいます。その後父君の欧州転任に伴って、ベルギーに遊学(2)することになりますが、癒えぬ病と向き合いながら勉学と詩作に励みます。当時の結核は、こんにちの癌にも等しい病です。はたして30歳まで生きられるかどうか。そんな漠とした不安の中で生まれてきたのが、名作として今に残る「月光とピエロ」でした。おどけたピエロを歌いながらも、行間に見え隠れするのは行く末の見えない恐れ、焦り、嘆きです。そして真っ白な頬を涙が伝います。

でも、ほどなく運命の歯車は好転します。第一次世界大戦が始まり、大學先生も戦禍を避けて父君の任地スペイン、マドリードに移ります。気候も変わり、両親の庇護のもとに戻ったこともあってか、テニスや社交(3)ができるほどに体調は良くなっていきます。

そればかりではありません。マドリードには後に大文学者となる大學先生にとって大きな幸運が待ち受けていました。それがマリー・ローランサンとの出会いでした。マリーは先年ドイツ人の貴族(4)と結婚してドイツ国籍となったため、大戦で敵対するフランスには留まることができず、やむなく第三国のスペインに亡命していたのです。縁あってそのアトリエを訪ねた大學先生は、彼女の作品を一目見るなり、絵画というよりこれは詩歌の部類に入る、と直感したのだそうです。

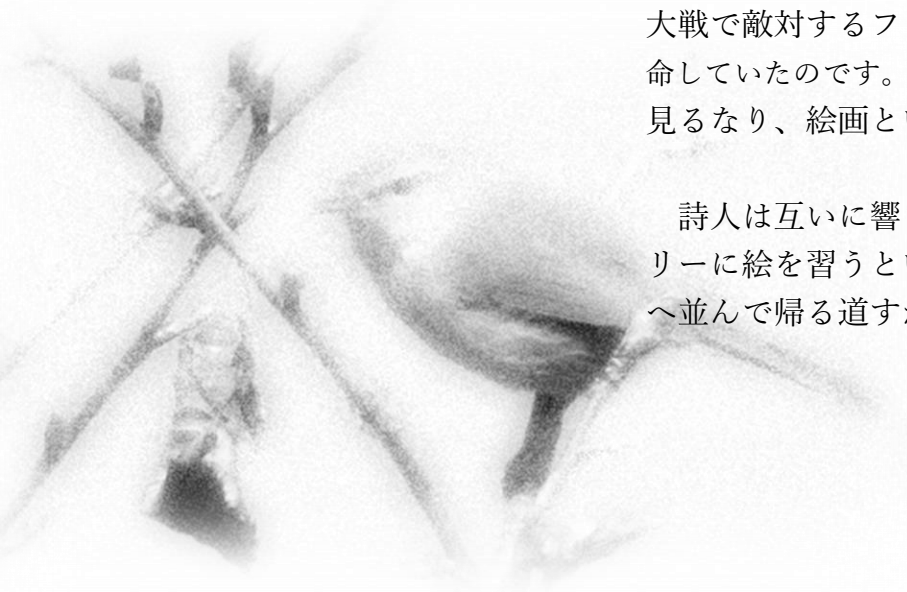
詩人は互いに響き合うのでしょうか。すぐに二人は心を通わせ、大學先生はマリーに絵を習うという名目でアトリエに日参したそうです。アトリエからホテルへ並んで帰る道すがら、花が咲くのは詩の話。

(1)与謝野寛夫妻の主宰する「新詩社」で出会い、同い年でもあり、生涯の友となった。

(2)父は大學3歳の折に先妻を亡くしており、その後ベルギー人の婦人と再婚。その縁があってベルギーに赴いた。

(3)継母スチナは日本公使夫人として、優れた社交力を発揮、内助の功を果たしていた。大學がマリー・ローランサンと出会うことができたのもそのおかげである。

(4)オットー・フォン・ヴェッツェン男爵。自ら画家と称したが、パリでピカソやブラックに伍して頭角を表していたマリーに比べれば、その腕前は見聞にも等しかった。





マリー・ローランサン「私の肖像」

1924年、パリで大學と再会したころの作品。
「マリー・ローランサンとモード」京都市
京セラ美術館にて。



あなたは詩人なんでしょう？聞かせてよ。あなたの詩を。
マリーの願いに、先生はきっと「月光とピエロ」を翻訳し
て聞かせたことでしょう。

お返しに、マリーはギヨーム・アポリネールの詩集を紹介します。アポリネールは当時フランスの最前衛の詩人でした。マリーはもともとピカソやブラックの紹介でアポリネールと出会い、同棲する仲にもなりますが、その後彼とは別れて、ドイツ人貴族との結婚を選んでいきます。しかし詩人としてのアポリネールのことは、生涯敬愛して(5)止まなかったそうです。だからこそ、大學先生にもその作品を薦めたのです。

(5)マリーは晩年、自分もアポリネールの眠るペール・ラシェーズ墓地に埋葬するよう遺言した。

大學先生も一目見てその斬新さに惚れ込み、多くの作品を翻訳して日本に紹介しています。そればかりか、アポリネールを糸口として現代フランスの優れた詩人たち(6)を次々と発掘することになるのですから、マリーとの出会いが、大學先生に計り知れない大きな収穫をもたらしたのは間違いありません。

(6)その翻訳作品を集め、昭和の日本に紹介したのが大學の代表作「月下の一群」である。これによって多くの若い詩人たちが大きな影響を受けた。

その後アポリネールは、マリーがドイツ人と結婚したことにやけを起こしたのか、自らフランス軍に志願して負傷、それがもとでちょうど大流行していたスペイン風邪であっけなく命を落としてしまいます。いっぽうマリーは結婚を解消して再びパリに戻ってきます。大學先生がパリのアパートマンにマリーを訪ね、顔を合わせたのはマドリードで別れて以来7年ぶりのことでした。二人は再会を喜び、お茶を飲みながら談笑したのですが、交わした会話はどちらかと言えばしんみりしたものだったようです。

別れ際に、マリーが目には涙をたたえながら先生に手渡した小さな紙きれには、自作の詩が書かれていました。

日本の鶯

この鶯 餌はお米です
歌好きは生まれつきです
でも やはり小鳥です
わがままな気紛れから
わざとさびしく歌います

あなたは月夜のロシニョールね。寂しげな歌ばかり歌うから。きっとマリーには「月光とピエロ」がとても印象的だったのでしょ。こうして先生は「日本の鶯」となったのです。先生もこの紙きれを生涯宝物にしていたそうです。そして「月光とピエロ」はマリーとの美しい思い出と深く結びついて、詩人堀口大學にとって最も愛おしい作品になっていたのではないのでしょうか。

(7)大學は昭和56年3月15日、長女すみれ子の腕の中で息を引き取った。89歳の大往生だった。3回忌法要は58年3月12日のことであった。

あれは春まだ浅い頃。先生の三回忌法要(7)が鎌倉の円覚寺で執り行われたときにも、ご本人の朗読する「月光とピエロとピエレットの唐草模様」が梅の梢に届いてきました。

(参考資料)

堀口大學全集 小澤書店

第1巻 詩集『月光とピエロ』『月光とピエロ草原社版あとがき』

第6巻 『詩と詩人』『捨遺(水かがみ)』

『キュビズムの女神』『或る日のマリイ・ロオランサン』

第8巻 『昭和30年12月14日 東京農工大学・女子美術大学混声合唱プログラム』

『月下の一群』堀口大學 講談社文芸文庫 1996年

『恋を追う女(小説マリー・ローランサン)』山崎洋子 集英社 1996年

『マリー・ローランサン』フロラ・グルー 工藤庸子訳 新潮社 1989年

『虹の館 父・堀口大學の思い出』堀口すみれ子 かまくら春秋社 1987年

『日本の鶯 堀口大學聞き』関 容子 角川書店 1980年

